

## 《研究ノート》

### アダム・スミス研究の現状と問題

——『アダム・スミス論集』を中心に——

#### 八幡清文

一  
アダム・スミスの『諸国民の富』の出版から二百年にあたる一九七六年には、内外において種々の記念行事が催され、この経済学の古典に対して二世紀を経た時点から多彩な検討がなされた。このほど実現したスミス全集の刊行もそうした記念事業の一つであり、特にその第五巻に初めて発表される新しい法学講義ノートは、スミス研究の新たな展開を直接に刺激する資料として格別の意義を有する。またこのスミス全集の付録として、各国の研究者の寄稿になる記念論文集が出版された。全集の付録とはいえ、本論文集はスミス研究において独自の位置を占める文献として注目される。

『諸国民の富』の刊行二百周年を記念する論文集ではあるが、本書は単にスミスの経済学のみを対象とする論文集ではない。本書の編者の一人であるA・S・スキナーの「緒論」における

言明によれば、「ただ単に経済学に集中するのは異なつて、彼（スミス）の業績の主要領域をカバーする」という論文集の構成は二部に分かれたれ、第一部には主としてスミスの道徳哲学、政治・社会思想などに関連する諸論文が、第二部にはスミス経済学の諸問題を多角的に論じた諸研究が収録された包括的な内容を有している。それゆえにまた本論文集の執筆者の専門領域は多彩であり、その顔ぶれはすぐれて国際的である。こうして本論文集は、『諸国民の富』の刊行後二世紀を経た地点におけるスミスの学問と思想に対する一つの総体的展望を与えていると考えられる。本稿は本書の諸論文の若干を限定された視角からではあるが紹介し、検討することを通して、現代のスミス研究において認められうるある種の特徴的な動向を把握し、同時にそこにおける問題点の一端を確認することを目的としている。

#### 二

従来のスミス研究においては、主要な焦点は『諸国民の富』に体系化されたスミスの経済学に関連する諸問題に当てられ、スミスの業績の他の部分は彼の経済学の解明にとって補助的意義をもつものとして論及されるのが支配的傾向をなしていたが、近年の顕著な動向として日本のみならず欧米においても、『道徳感情論』の倫理学、政治思想、歴史観、科学方法論に関するスミスの学説に対して多大な関心が寄せられ、それらに副次的なものを超えた固有の意義を認知する現象、すなわちスミス研究の視野の拡大とそれを背景としたスミス研究の重心移動とも

言いうる現象を指摘しうる。本論文集が先に触れたような二部構成を採用しているのはそうした研究動向の端的な反映に外ならず、本書の執筆者の一人であるA・W・コーツも「近年、スミスの経済学的分析から彼の社会学的・歴史の見解へと学問的関心の明瞭な転換が存在した」と注目すべき発言をしている。

このようなスミス研究の視野の拡大と重心移動は、高度に専門分化した学問の諸分野を統合し、体系化する視点を必要としている社会科学の現状を背景としても言えよう。さて『道徳感情論』に関しては、G・R・モロウ以後の研究の展開において、それをカントの倫理思想に類似した狭義の倫理学と把握する理解は克服され、ホッブズ以来の近代イギリスにおいて成立した固有の道徳哲学と捉えてその特質および意義を追究する研究が進展し、それとともに『道徳感情論』は経済学をも一構成部分とするスミスの社会科学の体系の基礎としての性格を有するものであることが具体的に解明されつつある。ところで『道徳感情論』の研究にあたって最大の焦点となるのは、「同感」、「公平な観察者」、「良心」などのスミスの学説の特質を具現した諸原理であり、またこれらの諸原理の異なる理解によって『道徳感情論』の全体としての解釈の相違がもたらされる。では本論文集の諸研究は『道徳感情論』のいかなる解釈を提出しているであろうか。ここでは異なる視角からそれに接近しているとみられるD・D・ラファイル<sup>(5)</sup>とL・バゴリーニ<sup>(6)</sup>の論文に即して検討しよう。

ラファイルは『道徳感情論』の特質を、「公平な観察者」の原

理の集中的な分析によって解明しようとする。彼によれば倫理学上の合理主義者が行為者の義務とそれを規定するための規準の問題に集中したのに対し、ハチスン、ヒュームは徳と第三者による、その判定についてより考察し、義務の観念に関しては不十分な展開にとどまった。スミスの獨創性は行為者が彼自身、行為に対して実行する良心の判断を説明する概念の展開にある。スミスの独自の公平な観察者の概念こそがそれにあたり、そのことは『道徳感情論』の六版に至るまでの改訂を検討することによって論証される。道徳的判断の理論が第二者、第三者による判断に限られるならば、公平な観察者というスミスに特有な概念は必要ではない。実際スミスは観察者の反作用の当事者に対する効果を理論化する時に、観察者の公平性を強調し始めるのであり、この効果によって当事者が公平な観察者の立場を内面化するところに良心が成立する。『道徳感情論』の第二版以後の良心の理論の改訂、発展は、その現実の観察者の判断と世論からの独立性に係わるものであり、スミスは次第に良心の独立性を認めるに至ったが、彼の根本的立場は不変であった。こうした分析から見れば、スミスにおける公平な観察者の概念は、人間の良心の判断が形成される現実の因果的なプロセスの仮説を提示する科学的性格の理論であり、ある種の道徳能力の社会学的・心理学的解明を意図した原理である。ラファイルはスミスがハチスン、ヒュームと共に、今日の経験的心理学にあたる人間性の観念による倫理学の解明をめざした経験論者であることを強調し、スミスがヒュームと共に経験的な倫理学の

運動の頂点を形成していたと評価している。

バゴリーニはラフィルとは異なって、他者の行為の判断を遂行する同感の機能に注目することから、スマスの同感および公平な観察者の原理が道徳的評価の原理として有する現代的有効性を確認しようとする。バゴリーニの理解では、同感<sup>1)</sup>は帰納的推論の作用による他者の状況の知的な表象過程と、想像の過程である自己自身の他者の状況への置換という二つの過程を含むが、彼はスマスの同感理論に次のような新たな要素を認める。まずスマスはつねに同感が生起する状況を重視しており、また同感を十分に情報に通じた観察者の作用として想定している。さらにスマスにおいては、同感<sup>2)</sup>は行為者の状況への置換だけではなく、行為の影響を受ける人物の状況への置換としても成立するから、この同感の主体は公平な観察者となり、彼の道徳的評価は公平性を獲得する。状況、公平性、情報はスマスにおいて複合的な道徳的評価の過程において相互に統合する要素である。以上の要素を含む公平にして事情に精通した観察者の判断は、彼が行為の生起する状況の情報に通じていることにおいてその状況における判断対象たる行為の原因・動機・目標についての帰納的知識をもつから、その時と場における社会的・法的・道徳的規準を表明することになり、彼の判断は社会的客観性を獲得するようになる。こうしてスマスの同感理論は、合理的要素<sup>3)</sup>帰納的推論と感情的要素<sup>4)</sup>想像力による感情共有との独自のな総合の原理である。バゴリーニは裁判官が同感による価値評価を遂行する場合、彼が対立する利害の下にある人々の

状況により参入することによってそれらの人々の状況の比較十分に実行する結果として彼の評価の恣意性は制限され、彼の道徳的<sup>5)</sup>判断は客観的公平を実現することになると説いて、スマスの同感理論が裁判における判決の原理として今日なお有する意義を結論している。

スマスの同感理論の核心を公平な観察者の原理に見出すことでは、ラフィルとバゴリーニとの立場は共通しているが、その原理を解釈する視点の相違から、同感理論の把握における両者の相違すなわちそれを経験的な科学理論として把握する前者と、それを実践的な道徳的評価の原理として把握する後者との相違が生起している。ラフィルの研究はスマスの同感理論の経験的性格を強調することにおいて、基本的にはT・D・キャンベルの最近の解釈<sup>6)</sup>を継承し、他方バゴリーニは同感作用の理知的側面を強調する点ではA・L・マクフィー<sup>7)</sup>と同様の理解を示している。したがって両者の解釈の相違は、キャンベルとマクフィー<sup>8)</sup>とのスマス理解の差異がある面において再現しているともみなしうる。両者の研究は『道徳感情論』に関してそれぞれに有意義な考察を展開しているが、同書におけるスマスの意図およびその同感理論の意義については特にラフィルの見解が示唆に富む。ラフィルも示唆するように、スマスの同感理論の真髄は、人間の自己自身の行為の道徳的<sup>9)</sup>判断とそれによる道徳原理の形成を人間の相互的同感<sup>10)</sup>相互的交通から発生的に展開するところにあり、『道徳感情論』の独自の貢献と画期的意義はまさしくこの点に存する。ラフィル、バゴリーニの研究はこのように

有益な論点を提起しているものの、それらはその主題の限定性のゆえに『道徳感情論』の全体像を提出するものではなく、また両者のみならず欧米の研究には概して、明確な歴史意識を基礎として『道徳感情論』を近代における人間および社会の原理を展開した一個の社会哲学の体系として把握する視角が希薄である。一見して非歴史的概念として構成されている同感、公平な観察者の概念は、近代社会における人間の存在原理を表現する範疇としての本質を有するし、スミスが説く正義の原理、徳の体系はまさに近代的・市民的な道徳原理としての実質を備えている。したがって『道徳感情論』の全面的な解明のためには、鋭利な歴史意識を基礎とした社会哲学的接近を必要とするが、こうした接近方法による『道徳感情論』の研究では、日本の伝統あるスミス研究において特色ある成果が蓄積されつつある。

## 三

欧米における従来の『諸国民の富』の研究は圧倒的に近代経済理論の立場からのアプローチによるものであり、そこにおいては現代経済学の諸テーマがスミスによっていかに認識され展開されていたかの説明が主たる課題とされてきた。最近ではS・ホランダーの著作がそうしたスミス研究における代表的成果であろう。『諸国民の富』に対する欧米のこうした研究方法は、〈スミスとマルクス〉という問題設定に象徴されるようなマルクス経済学の立場からの研究が多くの成果を生み出したきた日本の研究動向とは極立った対照をなしている。しかしすで

に触れた経済学以外のスミスの学問領域に関する研究の世界的な進展は、次第に欧米の『諸国民の富』の研究にも波及効果を及ぼし、倫理学、法学、歴史観などとの関連においてスミスの経済学を検討する傾向が醸成されつつある。これはいわばスミス経済学を根底において成立させている諸契機を析出することによって、その本質的理解に迫ろうとする方法である。本論文集において『諸国民の富』を対象とする諸論文の大多数も近代経済理論の立場からの研究であるが、同時にここに述べた問題関心に多少とも立脚する教編の論文も見出しうるのであって、これらの研究はそれぞれの問題設定からスミス経済学の制度的・人間的基礎を追求することによって、近代経済社会の本質とそれに内在する問題性に関するスミスの洞察を分析している。

一例としてN・ローゼンバーグの研究をとり上げよう。彼は資本主義と自由放任との代表的な代弁者であるはずのスミスが、高賃金を是認しながら高利潤を批判する逆説に注目する。スミスの高賃金論は当時においては進歩的な見解であるが、これは彼が高賃金は労働者をより勤勉にするとみなしたことによる。他方スミスの高利潤批判は、高利潤が市場経済の効果的な機能を表現するはずの資源移動に対する重商主義的障壁になるということの外に、経済主体の行動を形成する領域におけるその影響すなわち商業社会における人間の性格形成の側面を根拠としていっている。ローゼンバーグによれば商業の発展は節約、規律、廉直などの行動様式の特徴を促進するから、資本主義のもとでの成功のためには人間はこの種の特徴を具備しなければならな

いが、こうした特性は人間の生得的な資質ではない。資本家の高利潤は彼からこうした特性を喪失させて、地主階級の特性たる怠惰、浮薄、放蕩をひき起こすのであり、利潤の獲得が困難で競争の圧力が利潤率を低く保つ限りにおいて、資本主義は資本家階級がその徳性を発揮するように強制しうる。つまりスミスは高賃金が労働者に及ぼすのとは全く逆の結果を資本家の高利潤に認めるのであり、競争の本質的効果は、それが富の適度の獲得を可能にしながらも大財産の容易な蓄積を不可能にすることにある。ローゼンバークはスミスの逆説のこうした分析によりつつ、スミスは個々の資本家の社会的役割を称揚はしなかったが、競争に基づく資本主義のシステムとしての役割を称揚したのだと結論するのである。

ローゼンバークはスミスが構想する自由競争のシステムが彼の独自の人間把握と不可分に連関していることを指摘することにおいて、いわばヘスミス経済学における制度と人間の問題に関して示唆に富む見解を提出している。経済理論の体系がそれの前提とする固有の人間観に一貫して明示的に依拠しつつ構成されていることはスミス経済学の一大特徴であり、この側面を解明する彼の研究の意義は大きい。

ところでスミスが認識した近代社会像が決して無矛盾な社会像ではなく、一種の不調和や対立を内包する社会像であることは、本論文集においてもスミスの道徳哲学を論じる水田洋教授の論文<sup>(13)</sup>、彼の政治哲学を対象とするJ・クロアシーの論文<sup>(14)</sup>において摘出されている。『諸国民の富』を対象とする論文にも、

近代経済社会のネガティブな側面に対するスミスの認識の特質を分析するものが見出される。R・L・ハイルブローナーはこの「スミスの思想の暗い側面」を、彼の歴史観に即しつつ検討する。『諸国民の富』には経済的進歩の終局における物質的衰亡と、その過程において生成する道徳的腐敗という不調和な徴候についての認識が存在する。スミスは商業社会の経済成長によって労働者の賃金上昇が実現するから、商業社会は大多数の人々の幸福と慰安とをもたらすとみなしているが、スミスが描く歴史的進歩の終局においては持続的な人口増加の結果、賃金・利潤が非常に低く特に労働者階級の状態はマルサスの言うような不安定にまで低下する状況、すなわち不活発な静止状態が到来する。他方スミスは商業社会における人々の道徳的資質を未開時代よりも下等なものとして把握して、そこに労働者階級の愚鈍、無知、勇氣と身体力の喪失、教育の蔑視などを発見している。こうしてスミスの学説には、隠されてはいるが主要な問題性をはらむ逆説すなわち経済成長と歴史的進歩が結局は経済的衰亡と道徳腐敗との状態に帰結するという逆説が存在する。ハイルブローナーはスミスの歴史観に対する以上のような分析を前提として、スミスが歴史的進歩の究極の状態において発生するはずの社会的緊張に対して沈黙していることの意味を考察することにより、スミスの近代社会観を中世的なものを批判しつつもブルジョア社会それ自体に対して対決しえない啓蒙の時代に規定された歴史的想像力の産物として理解している。

E・G・ウェストはハイルブローナーが言うスミス体系の

「暗い側面」を、スミスによる近代社会の「疎外」認識の問題としてマルクスと対比的に考察する。ウェストによればスミスの学説には、現代社会学の疎外論における人間の無力性、孤立、自己疎隔の要素の中で自己疎隔の要素のみが見出される。またスミスにとって生産手段からの労働者の分離は重大な問題ではなく、彼が労働者は疎外・不幸を感じているとはみなしていないこと、分業によって労働者の生来の性質が消失するとは把握していないこと、さらに疎外が労働者にのみ及び資本家を包含しないと認識していることにおいて、スミスの疎外観はマルクスのそれとは根本的に相違する。そのうえスミスは『諸国民の富』の第一編では、分業がなければ労働者は怠惰になるとして分業が労働者の発明の才能を鼓舞すると説いたり、社会の進歩がすべての階級にとって快適な状態であるとみなすなど、『諸国民の富』の他の部分には同書の第五編・第一節の疎外論とは容易に符合しないような分業の効果に関する言及が存在し、このことはスミスの思想において疎外認識がどれほどの位置を占めているのかという疑問を惹起する。ウェストは以上の分析によってスミスの疎外認識にマルクスにおけるような含意を認知する見解を批判しつつ、スミスの思想体系においては資本主義の欠陥は国家による庶民教育の実施を通しての人間の自己完成の実現という解毒剤の形態で、資本主義それ自体によって解答が与えられていると解釈している。

ハイルブローナーとウェストの論文には、それぞれ「経済発展の有限性」、〈人間疎外〉という現代社会が直面しているとさ

れる諸問題が、二世紀以前のスミスの古典的な近代社会観においていかに認識され、処理されていたかを検討しようとする問題関心が伏在していると思われる。彼らはスミスが近代文明社会を決して無条件に楽観視したのではなく、資本主義的市場経済制度がはらむ特有の問題性を極めて特殊な仕方ではあるが知覚していたことを、それぞれの視角から指摘している。しかも彼らはそれを単なる経済学の問題としてではなく、近代社会の経済制度が惹起する人間の道徳的腐敗、疎外という社会哲学的な問題として論じており、そうした把握はスミスにとって「市民社会は人間の不完全な解決」であったとするクロプシーの理解とも相似する側面を有する。もっとも彼らはスミスの思想にマルクスにおける資本主義批判の先蹤を認めるクロプシーとは反対に、スミスが近代社会の欠陥を致命的な矛盾としては把握しなかったこと、その意味でスミスの近代社会観は啓蒙思想の世界観を特徴的に反映するものであったことを強調してやまない。ハイルブローナーはそこにスミスの思想の歴史的境界を明確に見出している。しかしスミスの思想に啓蒙思想の必然的境界を指摘することのみによっては、スミスの近代社会観の現代的意味は決して十全に究明されない。本論文集の編者であるT・ウィルソンも示唆するように、ここにおいてはスミスの経済思想の本質的問題として、それが内包する否定的側面を一方で知覚しながらも、なおスミスが近代経済社会の理想のプランとして、自由競争を原理とする資本主義的市場経済のシステムすなわち「自然的自由のシステム」を構想し、提唱し

たことの経済理論的・社会哲学的意味という問題が提起されるのである。スミスが定式化した自由主義経済思想の現代における意義と限界とは、かかる問題の究明を前提としてはじめて確定されなければならない。すでに触れたローゼンバーグの研究はこの問題に接近するための一つの指針となる解釈を提出しようを評価しよう。しかしこの問題は、『道徳感情論』をはじめとして既述した最近のスミス研究の視野の拡大・重心移動によって促進されつつあるスミスの学問体系の總体的説明を前提としてこそ十全に究明される問題として、今後のスミス研究に課せられてゆく。

(99) 研究ノ一ト

- (1) *The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith*, 6 vols. Oxford U. P.
- (2) *Essays on Adam Smith*, edited by A. S. Skinner & T. Wilson, Oxford U. P. 1975. 『スミス』本論文集社 EAS. 2 巻記本 9。
- (3) A. S. Skinner, Introduction, *EAS*, p. 1. 岩波社引用者。
- (4) A. W. Coats, "Adam Smith and the Mercantile System." *EAS*, p. 221.
- (5) D. D. Raphael, "The Impartial Spectator." *EAS*.
- (6) L. Bagolini, "The Topicality of Adam Smith's Notion of Sympathy and Judicial Evaluations." *EAS*.
- (7) T. D. Campbell, *Adam Smith's Science of Morals*. London, 1971.
- (8) A. L. Macfie, *The Individual in Society*, London, 1967.
- (9) 日本では『諸国民の富』の二百周年を記念して、日本の特色あるスミス研究の現状を集約する論文集『経済学史学会編『国富論の成立』一九七六年』が刊行された。
- (10) S. Hollander, *The Economics of Adam Smith*. Toronto, 1973.
- (11) N. Rosenberg, "Adam Smith on Profits—Paradox Lost and Regained." *EAS*.
- (12) 同様の視点はまた『スミスの経済成長論を制度的定数・合理的定数・自然的定数の関連から分析する』A・ロバの興業研究所訳『スミスの経済成長論』A. Lowe, "Adam Smith's System of Equilibrium Growth." *EAS*.
- (13) H. Mizuta, "Moral Philosophy and Civil Society." *EAS*.
- (14) J. Cropsey, "Adam Smith and Political Philosophy." *EAS*.
- (15) R. L. Heilbroner, "The Paradox of Progress: Decline and Decay on *The Wealth of Nations*." *EAS*, p. 524.
- (16) E. G. West, "Adam Smith and Alienation." *EAS*.
- (17) J. Cropsey, *op. cit.*, p. 152.
- (18) T. Wilson, *Some Concluding Reflections*. *EAS*.

(1 橋大大学経済学博士課程)